

福田徳三と田口卯吉をめぐる人々

Tokuzo Fukuda, Ukichi Taguchi and others

金 沢 幾 子

図書館学課程非常勤講師

抄録：

明治・大正・昭和初期の近代経済学者、社会政策学者、また大正デモクラシーの先駆者である福田徳三博士は、明治期の経済学者、「東京経済雑誌」の創刊者の田口卯吉から影響を受けた。

福田の母・信子は、田口の姉・木村鐙子を深く尊敬し、たえず話題にした。

田口の「東京経済雑誌」の後継者・塩島仁吉は、福田の結婚相手を仲介。

「東京経済雑誌」の投稿者・布川孫市は早くから福田の学問を評価した。後年、福田を東京高等商業学校から退職させた松崎蔵之助の学術上の誤謬を指摘した。

Summary：

Dr. Tokuzo Fukuda was a scholar of economics, social policy, and a pioneer of Taisho Democracy. He was influenced by Ukichi Taguchi—an economist of Meiji period, and a founder of *Tokyo Economist*.

Fukuda's mother (Nobuko) respected Mrs. Toko Kimura, the sister of Ukichi Taguchi.

Jinkichi Shioshima was an editor of *Tokyo Economist*, and he arranged a marriage between Dr. Fukuda and his first wife.

Magoitsu Nunokawa was a contributor to *Tokyo Economist*, and he reviewed scholarship of Fukuda on its magazine. He pointed out the mistakes in the book of Kuranosuke Matsuzaki, who dismissed Dr. Fukuda from Tokyo Higher Commercial School.

キーワード：福田徳三、福田信子、田口卯吉、木村鐙子、塩島仁吉、布川孫市、東京経済雑誌、松崎蔵之助

Key words：Tokuzo Fukuda, Nobuko Fukuda, Ukichi Taguchi, Toko Kimura, Jinkichi Shioshima, Magoitsu Nunokawa, *Tokyo Enonomist*, Kuranosuke Matsuzaki

1. はじめに

福田徳三博士 (1874-1930) は、明治・大正・昭和前期の経済学者・社会政策学者である。ミュンヘン大学留学の後、現一橋大学や慶応義塾大学で教鞭をとり、前者においては坂西由蔵、左右田喜一郎、大塚金之助、中山伊知郎などを、後者においては高橋誠一郎、小泉信三など、錚々たる人材を育成した。一方、自由主義者として吉野作造 (1878-1933) と黎明会を組織し、大正デモクラシーを先導した。また、社会政策学会においては、高野岩三郎 (1871-1949) とともに同学会のオピニオン・リーダーとして活躍した。経済理論、経済史、社会政策、労働問題などについての著作の大半を、生前『経済学全集』(全6集8冊)に収めたが、長年取り組んできた人間中心の経済学・福祉社会探求の労作『厚生経済研究』は最後の著作となった。

本論は、筆者の『福田徳三書誌』(日本経済評論社 2011.10)¹⁾の編纂過程において、福田徳三博士にかかわる人物について調査したものの一部を、研究ノートとしてまとめたものである。

2. 田口卯吉 (号：鼎軒) (1855-1905)

1) 田口の生涯と業績

江戸の徳川家後家人の子。17歳の折、大蔵省翻訳局の上級生徒として経済学の勉強を始める。当時同省には経済学の洋書が豊富に所蔵されていた。田口はお雇い外国人シャンド (Shand, A. A., 1844-1930) の知遇も得、6年間経済学の研究に励み、そのかわり、『自由交易日本経済論』と並行して『日本開化小史』を執筆、1877 (明治10) 年より5年間で全6巻を分冊刊行した²⁾。田口はシャンドから *Economic Journal* を見せられ、日本ではこうした雑誌の発行は無理だろうと言われて発奮し、必ずこうした雑誌を創刊することを誓った³⁾。田口は大蔵省を辞した後、経済雑誌社を興し、択善会⁴⁾の援助のもとで「東京経済雑誌」(*Tokyo Economist*) を創刊した。1879 (明治12) 年1月のことである。択善会から独立した田口は、同誌を通して、自由主義経済の立場から保護貿易論や政府の経済政策を批判した。また、歴史への関心から1891 (明治24) 年「史海」を発行した。

一方、経済雑誌社社屋をかねた田口の私邸において、経済を論談する会が生まれ、経済談会、東京経済学講習会を経て、経済学協会 (のち東京経済学協会) の設立となった。同協会は、演説・討論会と調査・提言活動を二つの柱とし、経済学思想の普及のために貢献した⁵⁾。調査活動は、銀貨調査、東京湾築港調査、鉄道調査、東京市街鉄道調査などである。

経済雑誌社は、『大日本人名辞書』、『日本社会事彙』、『国史大系』、『群書類従』など大部な書籍を編纂・翻刻・刊行した。また、『商業史歌』などの田口の著作のほかに、石川暎作、嵯峨正作、伴直之助、乗竹孝太郎などの訳者を得て、アダム・スミス、ケアンネス、スペンサーなどの海外の経済学を主とする翻訳書を刊行するなど、目覚ましい出版活動を展開した。

我が国の府県会は1879 (明治12) 年より開設され、田口はその翌年東京府会議員に、1889 (明治22) 年からは市会議員に、1894 (明治27) 年より衆議院議員を務め、没するまで延べ26年間政治にかかわった。

1905 (明治38) 年4月13日に満50歳で没した⁶⁾が、「東京経済雑誌」は乗竹、塩島仁吉ら

が後を継ぎ、1923（大正12）年9月の関東大震災によって終刊に至るまで45年間継続した。

2) 鼎軒会大会談話

福田は、田口の没後一周年記念として1906（明治39）年4月13日、向島八百松樓上での鼎軒会大会⁷⁾において、第一に、田口とはほとんど面識がないくらいだが、恩人と呼ぶ権利を持っている、第二に、田口が生命としていたのは経済学であり、自分は経済学の書生として第一年の命日を記念せずにおられなかったから出席したと述べた。前年の追悼会には、福田は東京高等商業学校を休職の身で東京にはおらず、新聞で田口危篤を知り、その晩は終夜眠れず、あとでその晩田口が没したことを知ったという。

福田が田口の名を知ったのは小学校12・3歳の頃で、『日本開化小史』を学校の行き帰りに面白い本だと思って読み、卒業してからは経済雑誌社の前を通るごとに、田口を見たいと社をのぞいていた。福田にとって「東京経済雑誌」は初めての経済学の教科書であった。田口は1890（明治23）年南洋商会を設立し、5月に南洋諸島へ向けて出発する際“別に臨み意中を表す”を同誌に掲載したが、福田はそれを表装して、始終ふところから出しては読んだという傾倒ぶりであった。

初めて福田が田口に会ったのは、1903（明治36）年11月18日、万国為替制度問題で来日したアメリカのコネル大学経済学教授ジェンクス博士（Jenks, Jeremiah, 1856-1929）を小石川植物園へ招待した会⁸⁾においてである。田口48歳、福田29歳。田口は経済原論で一手合願いたいと言い、福田は「願いたいのが敦盛扱いは御免蒙る」と答えという。言葉をかわした時間がわずか8分間くらいであり、以後福田は田口と論戦できることを待望していたという。

「東京経済雑誌」第1261号（M37.11.19）に田口の署名はないが、田口の論説と推測される“明治三十八年度の歳計予算並に臨時事件費の概要”がある。輸入米穀課税に関し、当時同じ問題を抱えるドイツにおいて、ブレンタノ博士（Brentano, Lujo, 1844-1931）がワグナー博士（Wagner, Adolf, 1835-1917）の所論を論駁した一文に言及し、‘関一福田徳三両氏訳商政経済論あり余輩は読者諸君の一読を勧告す’と注記した。ワグナーとブレンタノの所論は『最近商政経済論』と題して、第一編は関が前者の“農業国及工業国”を、第二編は福田が後者の“工業国の恐怖”を翻訳し、第三編にはワグナー、ブレンタノ両論稿に対してシュモラー（Schmoller, Gustav von, 1838-1917）が評言し、福田の講演速記“商業政策と商権の消長”を附録として、1902（明治35）年6月に大倉書店から刊行されたものである。この論説が田口の作でないとしても、雑誌責任者田口が必ず目を通したに違いなく、田口は福田と会合した折には、福田を少壮気鋭の経済学者として認識していたといえる。しかし、福田が望んでいた田口との論談は、田口の早い死によって、ついぞ訪れることはなかった。

3) 故田口博士贈位記念講演会

福田は、また、1915（大正4）年12月18日に開催された故田口博士贈位記念講演会において、“経済学者中の偉大なる非経済学者”⁹⁾を演じた。「子供の時から先生を能く知つて居つた積りで、

又先生を自分の崇拜の目的として居つたのであります」と前出の鼎軒会大会と同様のことを語り、「今日私が経済学を以て兎に角、口過ぎが出来る、経済学の書生の末班を汚すやうになつたのは、畢竟先生を慕ふ余りであります」。田口とは一度しか会談していない¹⁰⁾が、小学校にいる頃に田口の『日本開化小史』を読み、わかりもしないのに「東京経済雑誌」を喜んで読んでいたことを重ねて披露した。このユニークな論題は、J.S. ミル (Mill, John Stuart, 1806-1873) の「経済学者たる以外の何物でもない者は決して良い経済学者ではない」という言葉に依る。先の鼎軒会大会においては、福田は田口をイギリスのバジョット¹¹⁾に似ているという人が多いが、学問上、人格上からいってオランダのピアソン¹²⁾に似ているとした。しかし、この講演においては、バジョットが経済学者でありながら経済学者でないところの一番偉大なる者という評が、田口においてもいえるとした。

福田は講演の後半において、公平の論は不平の人より出づと言った福澤諭吉 (1835-1901) の名をあげ、さらに「明治年間の大不平家は福澤諭吉先生一人でなくして我が田口卯吉先生も確かにそれであつたらうと思ふ、此の二人を我経済学者の先輩として仰ぐことが出来るのは実に我々の幸であると思ふ」、「先生は抑々日本に対して、日本の思想に対して大不平を有つて居られたのであらう、是が即ち先生の論が大公平であつた所以ではないか、此大公平の論をなされた先生の身体は朽ちても先生の精神は滅せずして、我が日本の社会を多少なりとも感化し、我が日本の学問界に功績を遺された所以ではないかと私は考へます」、そして、「先生も人間として欠点があつたに相違ないが、併ながら大不平から出づる大公平の論、其公平の論を発表する機関であつた東京経済雑誌と云ふものは永久に忘るゝことの出来ない日本文明史上の大産物であると思ひます。」と述べた。一橋大学名誉教授安丸良夫は、「田口の思想の本質は、幕臣であつた田口の家系の経歴などを踏まえたいわば「大不平の議論」で「大不平から出づる大公平の論」というのが田口の思想に対する福田の批評でありました。そして、多分この批評は田口に対する批評であると共に、福田自身の立場を最もよく表すものであります。福田は猛烈な情熱と激しいレトリックを使って権威ある者に対して、生涯を通じて猛然と攻撃したのであって、そういう精神の系譜として田口を読み取っているのだと思います。」¹³⁾と指摘する。

4) 『鼎軒田口卯吉全集』第2巻「文明史及社会論」解説

福田は、自分の専攻する経済学でないにもかかわらず、『鼎軒田口卯吉全集』第2巻「文明史及社会論」(鼎軒田口卯吉全集刊行会 S2.7)の解説を引き受けたが、小学生として初めて読んだ『日本開化小史』が最も懐い出の深いものであつたことをその動機の一つにあげ、解説は田口の文明史のみについて若干の考察を試みることに限るとした。福田の解説は、それまでの通説や、史学界の長老格の三上参次博士 (1865-1939) および黒板勝美博士 (1874-1946) の田口論に対して反論している箇所が少なくなく、また、マルキシズムの立場にたつ新進気鋭の森戸辰男 (1888-1984) の「我等」誌上の論文に対する反駁を含めており、かつ福澤諭吉と田口との類似・非類似点をも挙げるものであつた。

前述の安丸は、「田口は、普通はアダム・スミス流の自由主義経済論を日本で積極的に展開した、

ブルジョア・リベラリズムの思想家と理解されているのではないかと思います。このような常識的な見方に対して福田は断固として反対し、日本ではブルジョアジーがはっきりとした自由主義を主張したことは一度も無かった、日本のブルジョアジーはいつも特権と結び付いて政府派だったといいます。それに対して田口の立場は徹底的な自由ということであり、その思想の本質はすべての特権に反対する平民主義、文明開化主義、自由民権主義だったとされます。田口は旧幕臣の江戸っ子で、終始一貫して政治的な被抑圧者のイデオログだった（中略）もっと長生きすれば河上¹⁴⁾に代わって日本一のマルキストになったかもしれない、とちょっと面白いことも言っています。¹⁵⁾と、福田の田口の捉え方のユニークな点に言及した。

田口の文明史は、‘バツクル¹⁶⁾の文明史などによつて、之が著述の動機を得られしやもまだ知るべからず。’という黒板博士に対して、福田は「兎に角バツクルは決して、最終の原因を政治に求むること田口先生の如くなるものでないことだけは確かである。」と言う。さらに、「私は疑ふ、田口先生は、バツクルの此書を初め数章以上に進んで通読せられたのであるか否かを。事によると先生は初めの数章殊に第五章までは、丹念に通読せられたであらうとも、第六章以下は果して如何であつたらうかと。殊に第十六章以下スコットランド論を読まれたなら、就中、バツクルのアダム・スミス論を熟読せられたなら、先生の史観は、可なり異なつたものとなつたのではあるまいか」、これが実現していたなら、田口が経済史に指を染めなかつた一つの謎は起こらずに済んだのではないかと、と経済学に通じた福田ならではの踏み込んだ論述をした（解説 28 頁）。

さらに福田は言う。その謎はとけるように思う。「先生は、無論文明史家ではなかつた。其れとは程度は異なるが、実は、先生は、経済学者でもなかつた。先生は政治学者にして政治家たり、政治史家であつたのである。而して、其れは、先生のイデオロギー其のもの、大きく云へば、先生の人生観其のものから、当然に然るのであつた。経済史に興味を起されなかつたのは、誠に必然的の一事である（略）社会問題に対する先生の態度も亦経済学者の其れ、又は文明史家の其れではなかつた。全く政治学者、政治家、政治史家の其れであつた。」（同 29 頁）と。

この解説をしたためにあたり、福田は 17・8 歳の頃に読んだことのあるギゾーの文明史¹⁷⁾を再読し、「其の流暢な、其の燦爛たる文章に思はず魅せられて、夜を徹して、全冊通読し終るまで巻を積くことが出来なかつた。私の生れた頃か、其二三年後かの間に於いて、此書を一読せられた田口先生が、恍惚として、心眼を開く思をせられたであらう光景は、今私の眼前に彷彿たるのである。」（同 30 頁）と想像をたくましくした。

1900（明治 33）年、福田が留学先のドイツ・ミュンヘン大学に提出した日本の経済史に関する卒業論文は、恩師ブレンターノの斡旋で出版され、外国の研究者から注目された¹⁸⁾。福田はブレンターノの経済史の講義を聴くとき、絶えずその顔に微笑を湛え、眼をきらきらさせていたので、ブレンターノが不思議に思って質問したところ、ブレンターノから学ぶところは、ことごとく日本の経済史と一致するからという答えが返ってきた。そこで、ブレンターノはヨーロッパの読者に日本の経済史を紹介させようとしたと、この書を出版した動機を記している¹⁹⁾。留学先では日本の歴史や経済史の文献は少なく、わずかに福田自身が所持していた竹越與三郎（1865-1950）の『二千五百年史』と文部省の『にほんれきし』の英訳などの数本のみと、留学仲間か

ら借りた『古事記』や有賀長雄(1860-1921)の著書、あとはミュンヘン王立図書館所蔵の欧文の日本関係文献をひも解くしかなかった。その執筆は困難をきわめ、一時は病気にもなり、廃稿も覚悟したほどであったが、ブレンターノが励まし、かつ二人の若い学者を福田の援助にあてさせるなどして完成にこぎつけた論文であった²⁰⁾。こうして一時は挫折しかけた福田を支えたのは、恩師の激励もさることながら、バックグラウンドとして日本の歴史および経済史の素養一幼少の頃から親しんできた田口の『日本開化小史』や「東京経済雑誌」一があったからこそ、やりとげられたのではなかろうか。

のちに一橋大学学長を務めた増田四郎(1908-1997)は、「一橋大学創立八十周年記念号：一橋学問の伝統と反省」(「一橋論叢」34(4):1955.10)において、文明史を講じた三浦新七博士(1877-1947)の「われわれの歴史の勉強は、どうせしろうとくさいやり方だ」という言葉を、われわれは学問のための学問といったかたちの勉強はして来なかった。どこまでも実用をはなれ得ない学問であって、歴史をやるといってもその例外たり得ないというほどの意味である。従ってそれは単なる欠点ではなく、むしろ学問にのぞむ態度や心構えの実践的性格を示唆するものだと捉え、かつ、しろうとくさいやり方の抱える問題をも鋭く指摘した。それについて安丸は、そういう「学問は、日本と東洋・西洋というような垣根を取り払った「素人の歴史」であり、在野精神に満ちたものであり、日本の社会の学問的位置付けを目指すという実践的な役割を担っていたのだ」という²¹⁾。この歴史についての「しろうとくさい」特色は、福田の歴史についての研究にも言え、また、田口が学び影響をうけたギゾーの文明史が「一篇の啓蒙的政治史論」であったが如く、田口の文明史もそうであり、「素人の歴史」という点でも、田口と福田は共通するところがあるのではないかと思う。

3. 木村鐙子(1848-1886)

1) 鐙子の生涯と業績

木村鐙子は田口卯吉の異父姉である。貧窮をきわめる幕臣生活の中で、鐙子は木村熊二(1845-1927)²²⁾と結婚したが、アメリカへ渡った熊二が1882(明治15)年帰朝するまでの13年間、夫の留守を守り息子を育てながら、田口卯吉の経済雑誌社の仕事を支えた²³⁾。キリスト者として帰国した夫熊二は牧会を開始し、鐙子も入信してからは下谷教会において婦人会を開き、日曜学校の創設を助け、明治女学校²⁴⁾を設立してその取締となり、また、婦人束髪会の幹事となり、万国婦人禁酒会書記レビット夫人(Leavitt, M. C., 1830-1912)の来遊を迎えて、その講演に出、その支会を組織することに尽力、婦人矯風会の設立にもあずかった。コレラに罹り、没するまでのわずか3年間のめざましい活動である。

2) 鐙子の三つの伝記

ここで、一つの問題が生じる。青山なを著『明治女学校の研究』²⁵⁾によれば、鐙子の伝記の一つは、木村の明治女学校の経営を継いだ巖本善治(1863-1942)²⁶⁾が、「女学雑誌」²⁷⁾第34号(M19.9.5)、35号(同9.15)、37号(同10.5)に「木村とう子の伝」1～3として掲載した

もの。その二は、これらをまとめて翌年に『木村鐙子小伝』として出版したもの（出版年月日はなく、巖本の序文が明治20年9月、同年11月12日発行の「女学雑誌」に同書の広告があり、出版はその間と推測される）。この「木村とう子の伝」と『木村鐙子小伝』との差異は、用語、用字にわずかの違いがあることと葬儀の記事が加えられた程度という。後者は本文34頁、口絵に鐙子の写真、勝安芳（海舟）、島田三郎、適堂学人の序、巖本の序がならぶ四六判の冊子で、『女学叢書』第1巻として出版された。ところが、第三の書、鐙子の夫・木村熊二の著と思われる無署名の文書「木村鐙子の伝」の存在が明らかになったのである。熊二が「木村鐙子の伝」を書きあげたのは、8月20日から月末までの間、葬儀は9月2日で、その時の用意であつたろうという。巖本は熊二の文書「木村鐙子の伝」に手を入れ、まずは「女学雑誌」に「木村とう子の伝」として発表し、後日『木村鐙子小伝』としてまとめたが、熊二はその『木村鐙子小伝』に序を添えるにあたり、本名をあきらかにせず、適堂学人というあまり人に知られない号を使用した。

文書「木村鐙子の伝」において、熊二は鐙子を、天保嘉永の時代には武家の妻として母として誠をつくし、開明の世の明治となつては婦人矯風の主唱となり女子教育を率先し仔々として情らず、と賞揚した。一方、巖本はその『木村鐙子小伝』において、きわめてすぐれた資質と深い教養をそなえた女性を、明治女学校の教育の理想、巖本の学校経営の源泉と位置づけ、追慕、哀悼の言葉をつらねた。木村と巖本のふたりが鐙子の人物を総括し結論的にいっている言葉は、武士の妻、武士の娘である。青山なをは、‘武士的婦人であり、またキリスト教の感化をうけた婦人であつたといふことが木村鐙の決着的特色であるといふ’²⁸⁾。

青山が「木村鐙子の伝」と『木村鐙子小伝』とを比較した箇所を以下に引用する。

‘とりあつかつてゐる事實は両書ほとんど同じである。しかし、前者が鐙の生涯をのべて、最後にキリスト教の信仰を堅持したことにより一生の意味を歸し、しめくくりをつけてゐるのに対して、後者の関心は、過去にはなくて、その「遺念」を将来に実現してゆくこと、つまり明治女学校を理想的女子教育機関につくりあげてゆく意欲の根源を示してゐることにある。この巖本の意志、あるひは覚悟は、『木村鐙子小伝』開巻第一の表紙裏にしるした献辞、‘余は此の書を捧げて故木村鐙君の愛嬢たる明治女学校の生徒諸子に呈す’の一事にも、あきらかである。巖本のまなざしは、鐙のすぎ去つた一生の時の流れの意味の上にはなくて、彼女の「志」の上に、とげられることなく世を去つた人の、思ひのこもる「志」の延長の上に、行くてに、注がれてゐるのである。同じ人の伝を同じ材料でかきながら、熊二は過去の事實をみ、巖本は将来の夢の途絶えたことを悲しんでゐる’²⁹⁾。

福田徳三があげた『木村鐙子の伝』は、木村熊二の著したものと同じ題であるが、熊二の文書は流布されてはならず、福田徳三の母信子が生前読んで、徳三にすすめたとすれば、それは時期的に「女学雑誌」掲載の「木村とう子の伝」の方である。福田が口頭で話したものが、「東京経済雑誌」上の談話概要では、とう子が鐙子と印刷されてしまったものと推測される。ただし、「女学雑誌」第37号のみではあるが、内題は「木村とう子の伝」、目次は「木村鐙子の伝」となっており、まぎらわしい状態にある。

3) 福田の母・信子と鏡子

福田徳三の母・信子は、福田徳三年譜（自記）³⁰⁾によれば、父の没後、母が柔術師範に再嫁したため、その代稽古まで勤めた。その後姉の婚家に養われたが、その間つぶさに辛酸をなめたという。福田徳兵衛と結婚し「家政に長じ、儿女教養甚だ力む」。長女トリ、長男徳三、次女満喜。次男、三女は共に夭死した。1881（明治14）年、徳三8歳のとき、神田大火のために一家は全焼し、徳三は「産後七夜の母を扶けて下谷御徒町に難を避け、旬日にして焼跡の仮小屋に帰り住む」。そこから木挽町に移ったが、「此時より母信子深く基督教に帰依し俠（キャン）的性格一変す而も家運益衰ふ」³¹⁾。信子は木村鏡子を非常に深く尊敬し、徳三が「まだ十歳のころから常に何かの教訓には必ず木村夫人の事を母が話した」³²⁾という。木村鏡子の没したその翌年の5月、「信子死す。享年三十八」（同上年譜）³³⁾。

福田は田口没後一周年記念の鼎軒会大会において、福田の母が木村鏡子を大いに崇拝していたこと、また、事実かどうかかわからないが、鏡子が小児を背にして枝豆を売って歩いたことがあるということを母が話して教えたこと、鏡子の没後、『木村鏡子の伝』という小冊子が明治女学校かで出版になって、其れを読めと云つて母にあたえられたことがあつたこと、田口の『日本開化小史』を読むまで、鏡子が田口の姉であることは知らなかったことなどを語った。

さらに、田口の贈位記念の講演においても、木村熊二がアメリカ留学中、鏡子は「まだ乳呑児を背負つて横浜の市中とかを枝豆を売つて歩いて、少しも郎君の心配、後顧の憂の無い様にして、遂に郎君をして立派に修業して帰朝せしむることを得られた、又最後はタシカ虎列刺病に罹つて御歿りになつたと記憶して居ります。其際の立派な態度に至つては、丈夫も尚恥づる程であつたと云ふことであります。是等は私の子供の時、母の口から聞きまして今も尚能く覚えて居ります。」と、母信子を通して聞かされた鏡子像を語った。また、田口卯吉には贈位があつたが、姉の鏡子が、まだ女子教育の盛んならざる時代にあつて、我が国の女学校の魁ともいふべき明治女学校を設立したのに、創立者に贈位がないのは如何なものか、明治女学校が現在なくなっているからといって御沙汰がないのは遺憾に思うとも発言した。

信子が「御入魂を願ひ」、かくも深く木村鏡子を崇拝、尊敬したか。それは、まず、ふたりの年齢が近く、生い立ちが非常に似通っていたことにある。当時の下級武士階級の生活の困窮をきわめたことは勿論であるが、ふたりが継父のもとで育ち、武芸をしこまれたこと—信子は継父から武道を仕込まれ代稽古を勤むほどになり、鏡子の継父（卯吉の実父）は、鏡子に四書五經の素読を教え、女子といえども武技に通づべしとの考えのもとに長刀の術をおしえ、かつ武芸の師につかせた—。また、ふたりともその継父のもとに長くはいず、非常な辛酸をなめたこと。向学心にとみ、子どもの教育に熱心であつたこと、性格が豪毅忍耐に富んだことなどである。さらには、その結びつきを強めた点にキリスト教信仰があげられよう。信子がキリスト教に帰依したのは1881（明治14）年ごろ、鏡子は1882（明治15）年宣教師フルベッキにより洗礼を受けた。両者ともそれぞれ、資質一変したと記される。ふたりが武士の娘・武士の妻たる精神の上にキリスト教を接ぎ木された、その共感も信子の鏡子尊敬の心底にあったと思われる。

4. 塩島仁吉（号：鶴城）(1862-1946)

1) 塩島の業績

塩島は23歳で田口卯吉の経済雑誌社に入社して以来、約40年間「東京経済雑誌」に係わった。経済学協会では鉄道調査委員会に所属した。田口が病気で長期療養し、乗竹孝太郎（号：肅堂 1860-1909）社長に引き継ぐまでの間、編集をまかされ、乗竹社長急逝後から関東大震災によって「東京経済雑誌」が廃刊となるまで、その主幹として活動した³⁴⁾。

著作としては、1888～1890（明治21～23）年「東京経済雑誌」にアダム・スミス、ケーンズ、ミル、チュルゴー、セー、マルサス、ケネー、フォーセッソなどの経済学者伝記の翻訳を載せ、翌々年それらをまとめて『泰西経済学者列伝』として経済雑誌社から刊行した。明治20年代後半には荻生徂徠、中山竹山、熊沢蕃山の著作を校して経済叢書として出し、1894（明治27）年には『日清戦史』を編集した。田口の没後、経済雑誌社2代目社長の乗竹を支え、1909（明治42）年から翌々年まで「東京経済雑誌」に“鼎軒田口先生伝”を連載し、1912（明治45）年単行書にまとめた。これは生涯や業績のほか、田口がとりくんだ諸問題について、その所論を整理し解説したものである。また、田口が政治家として多忙なうちに経済学の体系化を果たせなかったので、‘博士の経済論を祖述し、且、自ら考慮を廻らし、敢えて経済学構成の大業を企て’³⁵⁾、「東京経済雑誌」第1648～1730号（M45.5.25～T2.12.27）に“経済科学”欄を設け、経済学の定義ならびにその構成法、経済学と社会学、経済学と統計などを執筆した。1930（昭和5）年5月17日に開催された東京経済学協会創立五十周年故田口鼎軒君二十五周年記念会にあわせて、『田口鼎軒略伝』と『東京経済学協会沿革』を作成した。

2) 塩島と福田

福田は、田口の生前にも塩島と懇意にしていたかもしれないが、田口没後の1905（明治38）年12月経済学協会の例会（於富士見軒）の米穀輸入税廃止問題についての討論会あたりから交流が活発になる。福田は、翌年1月の例会（阪谷芳郎・松岡康毅両大臣招待会）において祝賀演説を、4月には鼎軒会大会において談話した。1907（明治40）年4月2日福田は塩島の仲介によって海軍主計総監村上敬次郎の長女雅代と結婚、「東京経済雑誌」にはこの式次第が掲載された。しかし、この結婚は長く続かず、嗣子了三が生まれてからほどなく1909（明治42）年には離婚となる。

1918（大正7）年6月、福田は東京統計協会の月次講話会において「物価騰貴の統計的研究」を講演し、塩島はその要約を“物価騰貴の主因”と題して「東京経済雑誌」第1959号（T7.6.22）に掲載した。当時、物価調整、物価問題は塩島のメイン・テーマでもあった。

福田は、『鼎軒田口卯吉全集』第2巻の解説において田口の政治観についてふれ、塩島のそれについても、「先生の衣鉢を忠実に襲ひて、編輯せられて居つた東京経済雑誌の議論は、如何なる問題に対しても結局其最終原因を政治に帰して居たことは、同誌の殆ど最終号までの愛読者であつた私の今に忘れざる所である。教育問題であれ、社会問題であれ、否文芸、学術の問題に至るまでも、結局其最終の解釈者としては、政治が指摘されて居る。今も猶生存して居られるから、

最も有力の証拠となると思ふが、塩島仁吉君の如き、其立論は、毎時左様であり、否私的の会話に於いても、同氏の必ず繰越されることは、其れであつた。疑ふ人は、一度塩島君と会談して見られれば、直ぐ首肯せられることであらう。又た東京経済雑誌の何千号に涉つて、其証文を列挙せよとなれば、其は無数であると思ふ。塩島君のみならず、木村半兵衛氏其他、先生の教を奉じて居た人々は、何れも皆左様であるやうに思ふ。」³⁶⁾と「東京経済雑誌」に共通する政治的論調、なかならず塩島のそれを指摘した。

3) 「東京経済雑誌」の危機

福田は「東京経済雑誌」の創刊四十周年記念号(T8.7.5)に塩島から執筆を依頼され、“東京経済雑誌の改造を希望す”と題して苦言と助言を呈した。「四十年の長日月幾百或は幾千の雑誌は或は起り或は仆れた中に東京経済雑誌だけは毅然として着実な真面目な方針を一貫して今日に至つたは田口先生の後を承るに故乗竹君あり塩島君ある為で先生は独り雑誌其ものに付ての大成效者たるのみでなく、能く人材を看出し之を育成し之を適処に置いたるに就ても大なる成效者と言はねばならぬ。」としながらも、産業革命以後から第一次世界大戦までの世界の経済生活の根本義について思想的変遷を述べて、「四十年の歴史てふ一の大勢力は急転直下の世界の大勢から見れば或は本誌を時代錯誤のものたらしめんとする危険を包蔵しては居らぬか」、「新しき時代には新しい思想を要する新しき皮袋に古き酒を盛るは愚である。田口先生は其時代の最も卓越せる先覚者であつた。其先生の遺業たる本誌は又た今の時代に於いて最も卓越せる先覚者たることによつてのみ先生の志を紹介者と云ひ得るのである。単に形斗り先生の業を紹介いだけのでは却つて地下の先生の御叱りを免れないと確信する」。露骨に言えば時勢にオイテキボリを喰うぞと警告を発した。

福田は、塩島に乞われるまでもなく、この当時の「東京経済雑誌」は、石橋湛山などの「東洋経済新報」や石山賢吉の「ダイヤモンド」誌の台頭によってその存在が忘れかけている、田口先生の遺憾察するに堪えたりとの危機感をもっていた³⁷⁾。しかし、福田の警告を生かすことも、改革の機運も見い出せないうちに、「東京経済雑誌」は関東大震災に見舞われ、二度と立ち直ることが出来なかったのである。

5. 布川孫市(号：静淵)(1870-1944)

1) 田口と福田についての学問上の評価

布川孫市は、「東京経済雑誌」の寄稿者常連で、静淵の号や山形東根のペンネームを用いた。我が国最初の社会学研究組織である社会学会の設立(1896年)にかかわり、社会学研究会においても活躍した社会学者であり、またジャーナリストである。

布川は「東京経済雑誌」第1835～1837号(T5.1.22～T5.2.5)に“田口博士と明治の経済学界”1～3を連載し、明治初期、西南戦役前後～明治二十年、明治二十年～日清戦争、日清戦役～日露戦争、日露戦役後の経済学界と時代を区分し、学問上の成果を列举、その特徴を分析評価した。布川は明治20年に至るまでは翻訳時代といえるが、日清戦争前後より日露戦争に至る

間の経済思想は、第1に社会問題研究が起った、次にドイツ学風が優勢になった、第3に私立大学の講義が翻訳臭味がなくなり独立の風をなしてきた、第4に雑誌の刊行が盛況になったことをあげた。福田と気賀勘重(1873-1944)を除いては法科大学出身の博士が多く、我が国の経済学の基礎はようやくこの時代に定まった観がある。要するにドイツ学風の加味が多くなったが、田口はあくまでも自由主義を主張し、自由貿易、英国学派をもって終始一貫していると論じた。

結言として、田口に関して、博士は我が経済学史上、逸すべからざるの価値あり、‘経済学者にして政治家たり又歴史家たり、経済財政の政策に就て当時の群を抜き、幾多出版物に於ても学界に貢献せしもの多大なり’。維新以来約五十年を五期に分けて、最初の四十年と最近の十年とを比較すれば進境の度、隔世の感あり、博士が西南戦争後、日露戦争に至る約三十年間にわたり斯界における花形役者を務めたのは‘蓋し男子の本懐なりと云ふべし’。また、田口に類するタイプは見出し難く、‘本多精一氏が政治上に奔走し主として財政論を為す如き多少の類似あり。堀江帰一氏は実際問題を評論する有数の学者なるが政治には一切与らず。福田徳三氏は純学理と史的研究に専らにして政治には与らず。独り小林丑三郎氏は其学風と現に代議士たる等に於て稍々似通ふものあり。其他は主として官吏又は教授の一方にして、専門の学究的態度を持するもの多し。’と分析した。

福田に関しては、『経済学研究』³⁸⁾の如き研究の態度は今日他に匹儔を見ることが稀なり。最近我が経済学界の逸材としては先づ福田徳三氏を推さざるを得ず。専修大学に田尻稲次郎、明治大学に小林丑三郎、早稲田大学に田中穂積、塩澤昌貞があるが、慶応大学が、福田、気賀、堀江、田中萃一郎の諸氏を網羅するは特筆するに足る。福田が『日本経済史論』を独文で発表したのは明治33年、「経済単位発展史上韓国の地位」³⁹⁾「経済史雑考」⁴⁰⁾の如き、何れも同氏の史的趣味の豊富なるを示す所あり、と高い評価を与えている。

2) 松崎蔵之助とのトラブル

松崎蔵之助(1865-1919)は、東京帝国大学で理財学・行政学を専攻後、ドイツ・フランスに留学、帰国後母校の教授を務め、1902(明治35)年9月東京高等商業学校の校長を兼任した。東京高等商業学校になじまない松崎のやり方に学生の反感がつる中、福田の自由主義的な学風、一橋会会計や艇庫問題についてとった校長への率直な批判的言論に対して、松崎は1904(明治37)年8月福田に休職を命じ⁴¹⁾、福田は‘百二十円の月給がその三分の一、四十円に減じて、鎌倉の長谷の石屋の二階借りの身となった’⁴²⁾。以後、福田は慶応義塾に経済学を教授することになる⁴³⁾。一方、松崎は学生の福田の復職運動を拒否し、商科大学問題(申酉事件)⁴⁴⁾に関して学生を処分して排斥運動を起こされ、ついに1909(明治42)年5月、辞職に追い込まれた。

布川が関与する松崎の問題は、松崎が『最近欧州列強の財政及び金融』(博文館1915)において、シュワルツ(Schwarz, O.)著『列強の財政』(Die Finanzsystem der Grossmächte)を抜き書きし、しかも数字に大誤謬があったことについて、布川が同年の「丁酉倫理会倫理講演集」10月号でその誤謬と倫理性を指摘し、学界の一大問題になったことに始まる。それに関して、松崎が私怨のために布川を利用した者があると暗に福田徳三を指したため、福田の名誉回復の法律上の問題

に発展しかかった事件である。その後、東京大学教授矢作栄蔵や友人らの斡旋により、松崎は福田に対して謝罪状を送って解決することになったが、著作上の誤謬問題は松崎の回答がないままに終わったという⁴⁵⁾。

6. おわりに

福田徳三が影響をうけた人物には、ドイツの恩師ルヨ・ブレンターノや、高等商業学校（現一橋大）の恩師神田乃武（1857-1923）などがあげられようが、幼少時より親しみ、尊敬してきた人物は田口卯吉をおいてない。福田は、故田口博士贈位記念講演“経済学者中の偉大なる非経済学者”において、「…先生のやうな偉大な学者、偉大な政治家にはなれないが、如何に小さくとも鼎軒型の学者になりたいと云ふ事は、子供の中から考へて居たことで、今日に至るまで其思想は変はらない」と述べた。菊池城司は『近代日本における「フンボルトの理念」―福田徳三とその時代―』において、福田の発言を‘彼独特のオーバーな表現となっているかもしれない。福田がこの講演を『経済学全集』第四集の断片の一つとして再録しているのは、田口に対する彼の尊敬と愛着を示唆している。’⁴⁶⁾と記す。

福田と田口に共通するのは、江戸っ子気質であることはいうまでもないが、なによりも徹底して自由主義にたったことであろう。田口は徹底した自由主義を一度もぶれることなく終生つらぬき、福田は常に学問の自由、研究の自由を求め、ことあるごとにそれを主張した。経済学においても、ドイツ経済学よりもイギリス経済学に親近感をもった。

福田は、経済学の名著・良書の普及を積極的に心がけ、『経済学経済史論叢』⁴⁷⁾の刊行をはじめとして『経済大辞書』⁴⁸⁾、『内外経済学名著』⁴⁹⁾を編纂、また、独力で三浦梅園の『価原』、荷田在満の『本朝度制略考』、狩谷掖斎の『本朝度量権衡攷』の印行・頒布を行い、この延長として瀧本誠一（1857-1932）を補助し、日本経済叢書刊行会より『日本経済叢書』全36巻、続編3冊を刊行した。『マルクス全集』⁵⁰⁾は実現にいたらなかったが、晩年改造社の『経済学全集』の企画をも手掛けた。雑誌の編集刊行にも乗り気で、「解放」⁵¹⁾の顧問ともなった。田口のように出版社を興しての活動はかなわなかったが、福田が心中、鼎軒型の学者を目指したことの成果の一つといえよう。

福田は、布川孫市が早くに喝破したように、あくまで経済学者で、田口のように政界に打って出ることはなかったが、黎明会をおこして頑迷思想の排除のためにデモクラシー運動に邁進した。関東大震災においては商大生を引き連れて罹災者調査を行い、改造社が立ち上げた二十三日会においては、大杉榮虐殺事件に関する建議や朝鮮人虐殺事件に関する決議にかかわった⁵²⁾。1924（大正13）年、内閣から帝国経済会議議員に任命されると、社会部所属として住宅問題を審議し、借地借家臨時処理法の公布にこぎつけた。中央職業紹介委員としても失業状況において職業紹介機能が発揮できるよう方策を計った⁵³⁾。国策にかかわったのは晩年においてであったが、それ以前においても決して象牙の塔に閉じこもる学者ではなく、行動する学者であったといえる。

福田徳三の母・信子にとって、木村鐙子は尊敬あたわざる人物であった。幼少時から鐙子の名とその行状を聞かされていた徳三は、木村鐙子と田口卯吉が姉弟であることを知らずにいたが、

知ってからは、何となく田口にたいして懐かしい気持ちがあったと述懐した⁵⁴⁾。それもそのはず、徳三は信子によって田口の書を読む前から、見えざる糸で田口に結び付けられていたのである。

田口卯吉は「旧幕臣、民権論者、キリスト教的人道主義者」⁵⁵⁾と称せられる。徳三はキリスト教信仰に入った母の影響で教会に通い、洗礼を受けた。学生時代は基督教青年会において活躍し、セツルメント活動も盛んに行った。ドイツから帰朝後は教会からは離れたが、終生聖書を読み続けた。信子の木村鐙子への崇拝、福田の田口への親密・尊敬、自由主義における両者の共通性などは、キリスト教を通しての内的・精神的基盤がその根底にあるといえよう。

塩島仁吉と布川孫市は、田口の創刊した「東京経済雑誌」の編集者と寄稿者という立場の違いはあるが、ともにこの雑誌に長期に渡ってかかわった人物である。また両者とも経済学に関心があり、学問上福田に注目してきたが、はからずもプライベートな問題においても、福田にかかわることになったのである。

注：1) 図書、雑誌の発行年に関して、明治はM、大正はT、昭和はSであらわした。

2) 引用文は、旧漢字は新漢字に改めたが、仮名遣いはそのままとした。

3) 福田の引用は「」、福田以外の引用は‘ ’を使用。

4) 図書には『 』を、雑誌には「 」を、論題には“ ”を使用した。

論 註

人名、事項の説明には、『岩波西洋人名辞典』増補版、『コンサイス日本人名事典』改訂新版（三省堂）、『世界百科事典』（平凡社）などを用いた。

- 1) 本書は2012年4月、第14回図書館サポートフォーラム賞を受賞した。
- 2) 杉原四郎「田口卯吉と経済雑誌」（『田口卯吉と東京経済雑誌』杉原四郎・岡田和喜編 日本経済評論社1995.2）3、5頁。なお、田口の『自由交易日本経済論』は1878（明治11）年1月発行、保護税の有害性を主張した。
- 3) 「東京経済雑誌」創刊号の「緒言」に田口自ら記載。
- 4) 摂善会は1877（明治10）年、渋沢栄一（1840-1931）が設立。田口は摂善会から補助を受け、大蔵省翻訳課発行「銀行雑誌」と摂善会発行「理財新報」を合併して「東京経済雑誌」となし、独立するまで摂善会録事、銀行の景況欄を掲載した。
- 5) 「東京経済雑誌」が創刊されてほどなく始まった論談会は観音会と名付けられた。経済談会は1880（明治13）年5月に発足、東京経済学講習会と改称されたのは定かでないが、1882（明治15）年1月には広告にその名が見える。同講習会は会員を募集して毎月講義録を発行した。講義録はいくつかの著作を併載していたが、1883（明治16）年12月に打ち切り、以後1冊に1著作を掲載する形式に改め、アダム・スミス『富国論』（石川暎作、のち嵯峨正作訳）、スペンサー『社会学之原理』（乗竹孝太郎訳）などを刊行した。田口は1887（明治20）年この講習会を経済学協会と改称、さらに経済学思想の普及に務めた。同協会は東京経済学協会と2つの呼称が使用されたが、後半は後者が使われ、田口の没後昭和期に入ってからでも存続した。詳細は、松野尾裕「田口卯吉と経済学協会」（前掲『田口卯吉と東京経済雑誌』）417-461頁。

- 6) 田口の伝記には、塩島仁吉編『鼎軒田口先生伝』経済雑誌社 M45.5 (復刻版: 大空社 1993『伝記叢書』114)、田口親著『田口卯吉』新装版 吉川弘文館 2000.11 (人物叢書) がある。また、前掲『田口卯吉と東京経済雑誌』の末尾の“田口卯吉の生涯と著作”は川又祐によって作成された。ここでは田口の署名が記された著作のみが扱われている。
- 7) この大会には、尾崎三良、島田三郎、磯辺弥一郎、吉田東悟などが参加、談話概要は「東京経済雑誌」第1334号 (M39.4.28) に掲載。
- 8) アメリカ政府より派遣されたジェンクス博士の小石川植物園招待会は、社会政策学会、経済学研究会、法理学研究会合同で開催、博士はトラストに関する演説をした (『読売新聞』9495: M36.11.20)。日本銀行における協議会は11月17日～19日に行われた (『渋沢栄一伝記資料』第7巻775-777頁)。
- 9) 「東京経済雑誌」第1834号 (T5.1.15) 掲載。この講演は、福田の『経済学論攷』(大鑑閣 T10.5) 314-325頁、および『経済学全集』第4集1435-1451頁に収録されている。
- 10) 福田は「鼎軒会大会談話概要」においても、贈位記念記事“経済学者中の偉大なる非経済学者”においても、田口と会ったのはたった一度と言っているが、『鼎軒田口卯吉全集』第2巻「文明史及社会論」の解説においては、「[田口] 先生の生前、私は先生と会談したことが唯一二度ある限りであるが」と記す (28頁)。その一において、福田は、田口が歴史に甚大な興味を持ち、特に国史については「史海」を発行して評論を続々出されているが、なぜ我が国の経済史に指を染めないのか、自分は歴史に素養はないが、それでも留学中発奮して『日本経済史論』を出してみた、田口はなぜ日本の経済史なり中国の経済史に進出しないのか、と質問した。対して田口は、それは考えないではないが、その暇をもたなかった、福田の『日本経済史論』は是非見たいが、英語か日本語の翻訳はないかと答えたという。同書の坂西由蔵によるドイツ語からの翻訳は、田口が没した2年後に出された。

なお、『鼎軒田口卯吉全集』第2巻の解説は、“文明史家としての田口鼎軒先生”として、「商学研究」7 (1): S2.10 および『厚生経済研究』刀江書院 S5.2-3 に収録されている。
- 11) バジョット (Bagehot, W. 1826-77) は、イギリスの経済学者、ジャーナリスト、評論家。*National Review* を出して文芸評論を、政治経済評論家としては *Economist* 誌の主筆を1860からつとめた。広範な問題を論じ、鋭い科学的批評眼でイギリス社会を観察した。主著に *The England Constitution* (1867)、*Physics and Politics* (1872) がある。
- 12) ピールソン (Pierson, Nikolaas Gerard, 1839-1909) オランダの経済学者、政治家。アムステルダム大学の経済学、統計学教授。オランダ銀行総裁、蔵相、首相、下院議員をつとめ、オランダ経済立法に影響を与えた。我が国においては A. A. Wotzel が英訳したピールソンの経済原論の緒論および第1編を、河上肇と河田嗣郎が共訳し『価値論』として宝文館から出版、福田が「国民経済雑誌」11 (2): M44.8 上で新刊紹介として取り上げた。
- 13) 安丸良夫 “社会学部の学問を振り返って” (「一橋社会科学」創刊号: 2007.1) 19-20頁。
- 14) 河上肇 (1879-1946) は、福田とほぼ同時代の経済学者、社会思想家。「日本経済新誌」を創刊し持論を展開した。『貧乏物語』は有名だが、それに対する批判が河上をマルクス主義に傾倒させた。河上が京都大学を追放になった時、福田が当局批判を「朝日新聞」に寄せた“笛吹かざるに踊る”は名文と称される。

福田は、この『鼎軒田口卯吉全集』の解説において、河上は自分にとって最も恐ろしい論敵だが、福田の論難を快く受け容れることもある、しかし、田口は議論を歓迎するが決して参ったといわない、終始一貫して自節を変えることは到底望みえないことではないかと論じている (同解説 36、39頁)。

- 15) 安丸 前掲 19頁。

- 16) バックル (Buckle, Henry Thomas, 1821-1862) イギリスの歴史家。文明史の研究に志し、History of civilization in England (1857-61、全2巻)の第1巻を出版して名声を得た。人類文化発達の要因として気候、土地、食物等の自然条件を重要視し、一種の唯物論的歴史哲学を唱え、思想界に著しい影響を与えた。
- 17) ギゾー (Guizot, F. P. G., 1787-1874) は、フランスの政治家、歴史家。『イギリス革命史』、『ヨーロッパ文明史』、『フランス文明史』などを著す。

なお、『丸善百年史』(丸善株式会社編・刊 S55.9)を分担執筆した植村清二氏は、田口の文明史がギゾーの啓蒙的政治史論に影響されたという福田の論拠を明白にできないと記す。(同書上巻 146頁)

- 18) 福田の卒業論文のタイトルは Die Entwicklung der Wirtschaftseinheit in Japan. 出版は Die gesellschaftliche und wirtschaftliche Entwicklung in Japan (Volkswirtschaftliche Studien / hrsg. von Lujo Brentano und Walther Lotz ; 42) Stuttgart, Cotta, 1900.

当時、書評などを寄せた経済学者には、ラートゲン (Rathgen, Karl)、ブランド (Brandt, M. v.)、シュタインメッツ (Steinmetz, S. R.) などがいる。福田の教え子である坂西由蔵は、明治38年休職中で小田原に籠居していた福田にこの書の翻訳を申し出たが、福田は「好事も無きには若かず」と答えた。前述のように、坂西訳は『日本経済史論』として明治40年4月に宝文館から出版されて改訂を重ねたが、のちに福田は自訳して『経済学全集』第3集(同文館 T14.10)に収めた。

- 19) 原文は Lotse 1 (13) : 1900.12 に掲載。坂西由蔵訳『日本経済史論』に「ブレンタノ先生序論」として、また福田自訳(『経済学全集』第3集)にも掲載されている。
- 20) 坂西由蔵宛福田書簡 (『経済学全集』第3集 19-21頁)。玉野井芳郎『日本の経済学』中央公論社 S46.11 (中公新書) 75-76頁。
- 21) 安丸 前掲 10頁。

- 22) 青山なを著『明治女学校の研究』163頁には、木村熊二本人が記した履歴が掲載されている。それによれば、本姓は桜井、18歳の頃木村家の養子となる。維新の際は勝安芳の手附となり東西に奔走。米国に在ること13年、帰朝後は基督教を称道し傍ら塾を開いて育英に従事。晩年は信州小諸に住んだが大正6年牛込教会に嘱託を受け以後、説教や児女教育のため滞京したとある。なお、鑑子との間に交わされた書簡は、『木村熊二・鑑子往復書簡』(東京女子大学比較文化研究所編・刊 1993.3)にまとめられている。

内村鑑三は葬儀に参列、弔辞を述べた。日記(昭和2年3月5日)に「去る一日木村熊二君八十四歳の高齢を以つて永眠せられ、今日其葬儀が牛込教会に於て営まれたれば、自分も出席して同君に敬意を表し、合せて知人を代表して少し計りの感相を述べた。(略)何しろ明治六年に基督信者に成られた人で我が国基督教界の長老であつた。弘化に生まれて昭和に眠り、旧き日本を新しき日本に繋ぐ功労者であつた。」と記す(『内村鑑三著作集』21 岩波書店 1955 264-265頁、『内村鑑三全集』35 岩波書店 1983 160-161頁)。

- 23) 鑑子は、卯吉が発行した『日本開化小史』の資料収集整理に尽力し、経済雑誌社の発足当初は事務を引き受けた。また1884(明治17)年12月に卯吉が『大日本人名辞書』の作成に着手した折には編纂に協力した。(川又祐「田口卯吉の生涯と著作」：前掲『田口卯吉と東京経済雑誌』585、583、571頁)。
- 24) 明治女学校は、1885(明治18)年木村熊二、鑑子夫妻が東京九段に創設したキリスト教主義の女子中等教育機関。最盛期は明治20年代で、巖本善治の努力によるところが大きく300名もの生徒が学んだ時期もある。教育程度は高く、課外活動も活発、寮は自治に任され自由な雰囲気になっていた。島崎藤村、北村透谷らも一時教壇にたった。1896(明治29)年校舍全焼を機に衰退し、1908(明治41)年暮に最後の卒業生を送ったあと廃校となる。
- 25) 青山なを『明治女学校の研究』慶応通信 S45.1 (『青山なを著作集』2)。

青山は、三種の鑑子伝の著者の推定を試み、「木村鑑子の伝」は夫熊二が葬儀のために用意したもので、巖本がそれをもとに「女学雑誌」に掲載し、さらに日をおかずに、『小伝』を刊行したものと結論づけた。研究・思考のあとを丹念にたどる大作『明治女学校の研究』の附録二には、「木村鑑子の伝」―参照『木村鑑子小伝』を、上下に並行掲載している。

なお、巖本善治の「女学雑誌」に掲載した「木村とう子の伝」と『木村鑑子小伝』の異同をしめすことは印刷上煩雑となり、またその犠牲をはらうほどの価値はないと判断したという。

木村熊二と巖本の二者による鑑子の伝記を比較して、前者には、帰朝者に対する批評や社会批判があり、それにつながる歴史観がひそんでいること、葬儀において履歴が演術されるためにほとんど全部の漢字に細字でふりがなが付されていること、後者には削られたが、「木村とう子の伝」に他日鑑子について一書を著したい旨の言葉があること、鑑子の手記や手紙による補足があることなどを挙げている。

また、青山は、表紙には「木村鑑子小伝」、内題は「木村鑑子の伝」という、西島政之（もと女学雑誌社勤務、のち経済雑誌社員）の筆写本の存在も伝える（178、773頁）。

- 26) 巖本善治は、津田梅子の父・津田仙の影響でキリスト教徒となり、のちにその立場から女性解放を説き、1884（明治17）年日本最初の婦人雑誌「女学新誌」（翌85年「女学雑誌」と改題）を発行。1887（明治20）年明治女学校の教頭、1892（明治25）年2代目校長となり、女子教育に尽力し、大きな影響を与えた。門下に大塚楠緒子、野上弥生子、羽仁もと子らがいる。妻はバーネット夫人の『小公子』の翻訳で有名な若松賤子。巖本は木村鑑子を尊敬し、姉とも慕った。塩田良平は「鑑子に女性の『久遠の像』を認めたのが巖本善治であった」という（塩田良平『近代日本文学論』萬上閣 S10.5 136頁）。
- 27) 「女学雑誌」は主宰者近藤賢三が1886（明治19）年死去したため、第30号より巖本が主宰、明治20年代のオピニオン・ジャーナリズムの一翼になった。女性の地位向上、婚姻制度の改良、廃娼、矯風などについて社会改良的な論を展開した。文学界の母体ともなり、女性の執筆者を育て、文学・思想・ジャーナリズムに影響を及ぼした。

第33号（M19.8.25）には、以下の木村とう子永眠記事が掲載されている（56頁）。

‘明治女学校の取締役木村とう子（木村熊二君の令閨にして田口卯吉君の令姉）は去る十八日午前十時四十分龍香の悪疫に罹りて永眠ありたり 同子は父母に対しての孝女、夫君に対しての貞女、令息に対しての賢母なる上に日本夫人の教導に関しては未だ比を見ざる程の熱心なる有為温厚の方なりしに忽ちにして此不幸を見ると痛惜の至にたえず 余は子としての教化を受くること茲に五年自から奮つて女学の格調に従事するも其助により従事し得るも亦た其助によれり 今忽ちにして此不幸を見ると慟哭の極に堪へざる也 他日精密の伝記をつまりて之を誌上の姉妹に報せんと欲す’。

「木村とう子の伝」は、「女学雑誌」中の“佳伝”項目扱いで、ナイチンゲールの伝、梅香女史の伝、小野小町の実説などと共に掲載された。

- 28) 前掲 青山 405頁。

筆者は一橋大学の第11回福田徳三研究会（2012.1.30）において、『武士の娘』（杉本鉞子著 大岩美代訳 筑摩書房 S42）を引き、福田の母・信子を、家老の娘と下級武士の娘との違いはあれ、その精神において同じものを見ると発言したが、木村鑑子の伝記と青山なをの研究書において、このことを具体的に確認できた。

- 29) 前掲 青山 399頁。

- 30) 福田徳三年譜（自記）は、『経済学全集』第2巻「経済学原理」改造社 S3.9の巻末に掲載。『福田徳三先生の追憶』福田徳三先生記念会編・刊 S35.5は、昭和3年で終わった改造社版にその後を追加して掲載した。

- 31) 『福田徳三先生の追憶』上の口絵(3頁)写真の裏書きにあり。
- 32) 前掲“経済学者中の偉大なる非経済学者”(『東京経済雑誌』1834:T5.1.15)121頁。
- 33) 福田は、「慈母の死に会して、性格一変、級中第一のいたづら者化して級中第一の操行優良となり、進級の際賞状を受くるに至る。学業も落第二回、其後も成績常に最劣等、此時より俄かに級の主席を争ふに至る。最も得意なりしは作文、国語漢文、英語、之に反し算術、体操、唱歌は依然として劣等なり。」と記す。(前掲 福田徳三年譜)
- 34) 塩島については、溝口喜一が、杉原四郎編『経済雑誌の源流』有斐閣 1990 第2章『東京経済雑誌』と『東洋経済新報』において、田口、乗竹、塩島それぞれの論調を分析しその特徴をあげている。
- 35) 『東京経済雑誌』1648(M45.5.25)“経済科学”緒言 26頁(通頁942頁)。
塩島は田口の心理的科学としての経済学という定義を継承するが、マクロードと乗竹の影響が大きく、学と術の区別ではケアンズやシーニアの影響もみられるという。(前掲『田口卯吉と東京経済雑誌』77頁)
- 36) 前掲『鼎軒田口卯吉全集』第2巻 25頁。
- 37) 福田「経済学研究の栞」(『経済学全集』第1集)291頁。
杉原四郎は、福田の批判後の『東京経済雑誌』2064(T9.7.10)は改造計画を発表したが、第一次大戦後の情勢に対応しようとする新味も積極性も見られない。一般経済雑誌は「東洋経済新報」、「ダイヤモンド」、「社会政策時報」などの新興勢力が競争し、学術経済雑誌もまた「国民経済雑誌」(神戸高等商業学校・東京高等商業学校)、「三田学会雑誌」(慶応義塾)や「経済論叢」(京都大学法科大学)などを中心に続々と新雑誌が登場してくる。明治末から大正にかけての経済雑誌界のこのような激動の展開を「東京経済雑誌」の受身の改造では決してのり切れまい。‘かりに関東大震災という不測の事態がなかったとしても、その衰退と消滅は時間の問題だということを、おそらく福田は警鐘をならしつつも、心中ひそかに予測していたのではなかろうか。’と指摘す。(前掲『田口卯吉と東京経済雑誌』16～17頁)
- 38) 福田著『経済学研究』同文館より1907(明治40)刊行。
「東京経済雑誌」第1395号(M40.7.6)に同書の書評が掲載された。(以下筆者要約)。
‘明治34年帰朝以来39年末に至る5ヶ年間公けにした研究、論説、評論、講演、翻訳等を集めた1冊。主はトマス・タギノの経済学説、企業心理論、米穀輸入税廃止論など。何れも著者の学殖豊富にして卓越成る見識を示す。評者は著者の労働経済論を初めとして雑誌論文や国民経済学原論等に接するに及んで、著者は高等商業学校出身者の中の秀才であるのみならず、経済学において一種の天才を有する人であり、当今の経済学者中最も優秀の位地を占めるものと云わざるをえない。本書の収める所は経済上の学説と実際に亘る、斯学研究者は必ず一読せざるべからず’。
『労働経済論』(M32)はブレントノと福田の合著で同文館刊、『国民経済原論』(M36)は哲学書院刊。評者は塩島仁吉か。
なお、『経済学研究』は『続経済学研究』(T2)、『改定経済学研究』(T4)、さらに2著を合冊して『経済学研究』(T9)前編・後編として刊行された。
- 39) “経済単位発展史上韓国の地位”は、「内外論叢」2(1)、2(5)、3(6)、4(1)(M36.2～M38.2)に掲載され、上記『経済学研究』(M40)、のち『経済学全集』第4集(T13)に収録された。K.ピュッヒャーらのドイツ歴史学派の経済単位発展史観に基づく朝鮮社会停滞論の立場をとったが、のちに福田は朝鮮の独立運動を原則支持する方向へ転換した。
- 40) 「経済史雑考」は、『続経済学研究』(T2)第2篇にあたり、「ギルド」の辞義と起源、商人「ギルド」、「クラフト・ギルド」、我邦中古商業の「座」、祓除と貨幣との関係、物価名義雑考、ラグサの商業帳簿の論文を含む。

- 41) 福田は、この休職命令の出された背景について、桂内閣においては自由主義的な経済学者は政府の財政批判をする裏切り者的な扱いを受けており、松崎校長らはドイツのワグナー派に依拠していて、福田の教授活動は国家にとって危険と判断されたと、恩師ブレンターノに宛てて伝えた（柳沢のどか翻刻・翻訳、西沢保校関『福田徳三—ルーヨ・ブレンターノ書簡 1898-1931年』一橋大学社会科学古典センター 2006 82-86頁）。

休職は1906（明治39）年8月1日満期となり、東京高等商業学校を退官となる。

- 42) 菅禮之助「一橋三教授：関一、福田徳三、佐野善作三先生のことども」（『如水会々報』465: 1969.1 26頁）。

菅（1883-1971）は、福田休職を命じられた折復興運動を起して学校から除名される（3ヶ月後復学）。福田は「トモヨルセ」と打電。卒後財界に進み、のち東京電力会長に就任。

- 43) 慶応義塾の在職は1905（明治38）年10月～1918（大正7）年まで（この間辞職復職をくり返す）。政治科のち理財科で、純正経済学、経済原論、経済史、社会政策などを教授した。

福田は1910（明治43）年東京高等商業学校へ講師として復職、教授となったのは1919（大正8）年5月である。社会にあつては、社会政策学会、吉野作造との黎明会など盛んな活動を展開する一方、自宅においては、慶応義塾と東京高商の学生が参加するアダム・スミスの『国富論』の読書会（千駄ヶ谷読書会）を持った。義塾の福田門下生として、かつ義塾の教授になった者には、小泉信三、高橋誠一郎、三邊金蔵、野村兼太郎、加田哲二らがいる。

小泉信三（1888-1966）は、福田の講義を受けるため、政治科に進学。福田の斡旋により『ジェヴォンズ経済学純理』（1912）を出版。のち、慶応義塾塾長となる。高橋誠一郎（1884-1982）は、経済学史とくに重商主義を研究。第1次吉田内閣改造の折文相に起用された。両者ともその著作において、福田の授業や義塾の地方巡回講演の様子を活写している。

- 44) 申酉事件は、明治40年（戊申）、42年（巳酉）に亘った東京高等商業学校の大学昇格運動を称す。大学昇格は福田や関一らが1901（明治34）年1月ドイツ留学中に起草した“商科大学設立ノ必要”（ベルリン宣言）以来の悲願であったが、文部省および帝国大学の意向は帝国大学法科大学内に商科大学を設置することであり、1909年5月6日文部省令をもって東京高等商業学校の専攻部廃止が決まった。5月11日同校の学生は総退学を決議し、「去校之辞」を朗読した。渋沢栄一を代表とする五商業会議所、大学、同窓会などの働きで総退学は取り消され、6月25日今後4年間専攻部を存置の文部省令が発布された。

福田は休学中。

- 45) 「読売新聞」13839（T4.10.30）、13841（T4.11.1）掲載。

布川の「丁酉倫理会倫理講演集」第158号（T4.10）、159号（T4.11）に掲載した論題は、“松崎博士の『最近の欧州列強の財政及び金融』を評して学者の徳義に及ぶ”、“松崎博士の著作的不道徳”である。布川は、松崎が自著についての弁解の権利と義務を棄ててかえりみないことや、‘予以外の人士にまで怨言を放ち、全然感情的囁語を以てし、聊も学者的良心を発揮し得ざるは予の甚だ惜しむ所なり’（第159号 67頁）と記した。

- 46) 菊池城司『近代日本における「フンボルトの理念」—福田徳三とその時代—』広島大学教育研究センター 1999.3（高等教育研究叢書53） 14頁。

- 47) 同叢書は同文館から、第1冊に坂西由蔵著『企業論』1904（明治37）年、第2冊に左右田喜一郎著『信用券貨幣論』1905（同38）年を刊行したが、福田が東京高等商業学校休職の処分にあったため続行が不可能となった。

- 48) 『経済大辞書』全9冊 同文館 1910-1916。5冊版は1916年刊行。福田は、西洋に関して全般の統一をはかり、西洋経済史、社会主義及び社会問題の編纂に従事、自らは経済学原理、経済史、経済学史、

社会主義および社会問題について執筆した。

- 49) 『内外経済学名著』は、坂西由蔵と共編、同文館より1913-1929全6冊を刊行。福田は“刊行の趣旨”および各冊に対して“序”を執筆した。第1冊『ジェヴォンス経済学純理』小泉信三訳、第2冊『フックス国民経済学』坂西由蔵訳、第3冊『リーフマン経済学原理』宮田喜久蔵訳、第4冊『クールノー富の理論の数理的原理に関する研究』中山伊知郎訳、第5冊『ゾード消費組合論』久我貞三郎訳、第6冊『ロッシヤー英国経済学史論』杉本栄一訳。
- 50) 『マルクス全集』は福田が企画・校註、大鐙閣から全20冊の刊行予定で、第1、2部資本論（高島素之・福田）、第3部剰価値学説史（坂西）、第4部経済学説批評及哲学の貧困（大西猪之介）、第5部諸小著（高島）、第6部遺稿集（寺尾隆一）などと新聞記事（「読売新聞」1919.10.7）にも掲載された。発行にあたり『マルクス全集内容解説』が作成され、福田は其中で索引の重要性を説いた。しかし、高島と折り合いがつかず、福田は『資本論』第1冊のみ校註して撤退、のち高島が独力で『資本論』を完結した。
- 51) 「解放」は1919（大正8）6月創刊。計画段階では福田徳三が主筆、堺利彦（1870-1933）が編集長と構想されたが決裂。福田は創刊号に“解放の社会政策”、“マルクスの真本と河上博士の原本”を掲載し、前者において河上肇の『貧乏物語』への批判を加えた。「解放」は翌年2月から新人会の手で編集されることになる。
- 52) 二十三日会は、大震災直後改造社社長山本実彦が提唱し、旧黎明会のメンバーを中心に震災復興にあたる思想家が会合、福田が会の名称を決めた。大杉榮虐殺事件に関する建議、朝鮮人虐殺事件に関する決議、火災保険金支払い問題を討議したが、‘積極的な活動を為すことなく消滅’した（松尾尊兌『民本主義と帝国主義』みすず書房1998 219頁）。
- 53) 福田は著書『復興経済の原理及若干問題』同文館1924の序において、“住宅問題に関する立法改正”、“職業紹介国営可決”の新聞記事を掲載し、長年主張してきた問題、殊に生存権、生活本拠権の擁護としての住宅立法と、営生機会の確保としての失業防止の対案（中央職業紹介事業改善案）とに自分の意見の一部が容れられた喜びを記した。
- 54) 前掲 “経済学者中の偉大なる非経済学者”（「東京経済雑誌」1834：T5.1.15）75頁。
- 55) 前掲 青山なを『明治女学校の研究』162頁。

青山は明治女学校を後援する縁故として田口卯吉、島田三郎をあげ、‘この人々には共通点がある。彼等は、旧幕臣、民権論者、キリスト教的人道主義者たちである。世界情勢の判断に自信をもち、国内の動向に批判をもつ知識人達であって、明治前期の思潮に特異の系譜を形成する人達である。（後略）’と指摘した。